Actinotignum schaalii による尿路感染症の一例

◎千味 和宏[1)]、伊藤 千香子[1)]、神田 有紀、土田 純也[1)]、小野 篤史[1)]、山田 公子[1)]
済生会新潟病院[1)]

【はじめに】*Actinotignum schaalii* は非運動性,無芽胞,非抗酸性の通性嫌気性ｸﾞﾗﾑ陽性桿菌であり,尿路感染症の原因菌として知られている．今回,*A. schaalii* による尿路感染症を経験したので報告する．

【症例】6 歳,女児．38℃台の発熱があり,前医より入院加療目的で当院紹介となった．入院時検査:血液検査;白血球数 14500/μl,CRP2.19mg/dl,PCT0.02ng/ml,尿沈渣;赤血球 1-4/HPF,白血球 50-99/HPF,桿菌(3+),腹部ｴｺｰ;左腎盂尿管壁に肥厚を認め,腎盂もやや拡張していた．後日,排尿時膀胱尿道造影が実施され,腎盂腎炎および左膀胱尿管逆流と診断された．微生物学的検査:血液培養と尿培養が提出された．尿培養のｸﾞﾗﾑ染色所見は多数の Coryne formｸﾞﾗﾑ陽性桿菌が観察された．分離培養は 35℃ 5%炭酸ｶﾞｽ培養下で 48 時間後に微小集落が観察された．同定検査はｶﾀﾗｰｾﾞ試験陰性,ｱﾋﾟｺﾘﾈ(ﾋﾞｵﾒﾘｭｰｼﾞｬﾊﾟﾝ)を用いた解析は *Actinomyces turicensis*(99.8%)であった．質量分析法(MALDI Biotyper)による同定結果では,*A. schaalii*(Score value 2.26)と同定された．質量分析法による結果とｱﾋﾟｺﾘﾈから得られた生化学的性状を加味した結果,*A. schaalii* を最終報告とした．薬剤感受性検査は MIC 値のみの参考値として報告した．尚,血液培養は 7 日間培養陰性であった．

【考察】*A. schaalii* は尿路感染症の原因菌として知られている．質量分析装置による同定方法が普及する前まで,本菌は汚染菌あるいは検査対象外の細菌として,臨床的重要性が過小評価されていた可能性がある．また,好気培養下での発育は難しく,炭酸ｶﾞｽ培養や嫌気培養の条件が必要になることも影響していると考えられる．当院は日常的に炭酸ｶﾞｽ培養を行っており,本菌の検出が可能であった．ｸﾞﾗﾑ染色所見で Coryne formｸﾞﾗﾑ陽性桿菌が観察された場合,本菌を念頭に置き炭酸ｶﾞｽ培養か嫌気培養を追加することが重要と思われる．

【連絡先】025-233-6161　内線 2239